

MMMT: Monday Morning Manabi Time!



MMMT: Monday Morning Manabi Time!

1. オープニング(導入)

2. ボディ(本論)

- 研修転移
- 研修評価
- OJT 等

3. クロージング(結び)

- 1) プラトン、ロックによる形式陶冶説
- 2) ソーンダイク(1901)による転移研究
- 3) フレイシュマン(1953)による企業における研修転移研究

「転移」のルーツ(1) ソーンダイク(1901)

この「○→○」という転移が、実際に起こっているのかという認知研究を、最初に行ったのが、Thorndikeソーンダイク(1901)です。つまり、**転移研究のルーツは、ソーンダイク(1901)にある**と言えます*。

ソーンダイクは、共同研究者のWoodworthと共に実験室で、四角形や三角形を使った実験を行い、その結果から、同じ要素が含まれていれば、転移は生ずるが、そうでなければ転移は生じないと結論づけました。「**同一要素説 theory of identical elements**」と呼ばれる考え方です。

当時のソーンダイクの「仮想敵」は「形式陶冶説」でした。彼は「**形式陶冶説**」には**科学的根拠がない**ことを実証するために、上記実験を行ったのです。では、彼が批判したかった「形式陶冶説」とは何なのでしょう？

*転移のレビュー研究の多くが、1901年のソーンダイクの研究からレビューをしています。(例: Badwin & Ford, 1988; Detterman, 1993) その観点からも、ソーンダイク(1901)を、転移研究のルーツに置くのは過ちではないと考えられます。

「形式陶冶説」とは

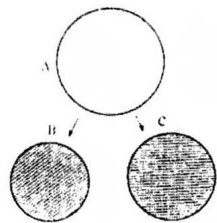
「形式陶冶 Formal discipline」とは、思考力、記憶力、判断力、意志力等の精神的諸能力の育成を重視する考え方で、ラテン語といった古典語やユークリッド幾何学といった数学中心の古典的教養を重視する教育的立場を指します。それに対して、文化の内容を知識として習得させるために、近代科学技術に直結する実学的教養(物理学、生物学など)を重視する教育的立場が「実質陶冶 Material discipline」です。

形式陶冶説は、能力心理学 faculty psychology を基盤とし、ある領域で形成された能力が他の領域に「転移」することを前提としています。形式陶冶を支持する立場の人たちは、ラテン語や数学といった実生活には役立たない「退屈で難しい講義」を受ける事で、精神 mind が鍛えられ、それによって、他の領域での学習も進むと考えたのです。この形式陶冶の考え方に対して「一つのことを学んだからと言って、それは他の分野に簡単には転移しない。転移するのは、同じ要素が入っていた場合のみ」という「同一要素説」を唱えたのが、ソーンダイク(1901)だったのです。

「転移の間の関連性」

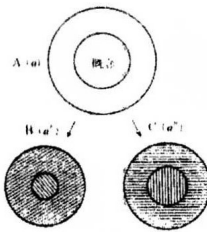
M M M T

形式陶冶
普遍的転移



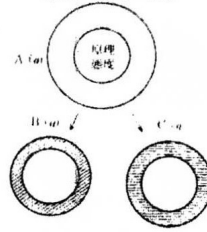
〔図Ⅰ〕

新形式陶冶
概念的転移



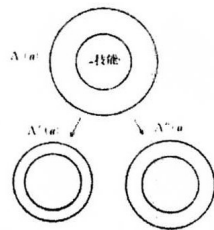
〔図Ⅱ〕

一般的転移
非特殊的転移
原理、態度の転移



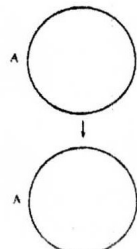
〔図Ⅲ〕

特殊的転移

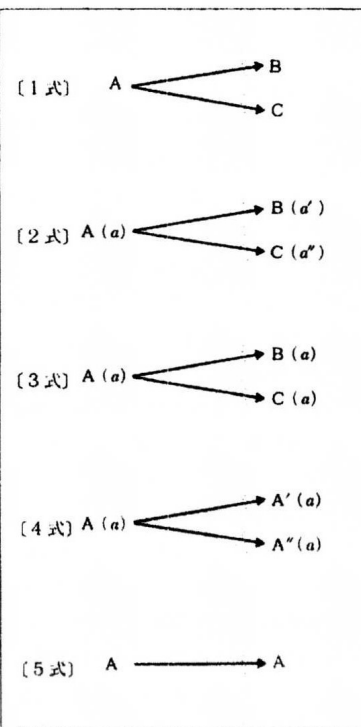


〔図Ⅳ〕

実質陶冶
同一性転移



〔図Ⅴ〕



〔表Ⅰ〕

佐藤(1979)は、5段階に分けて、
転移の間の関連性を図式化しました。

(佐藤三郎(1979)教育方法
吉田・長尾・柴田編 有斐閣双書.)

転移のルーツ(2) 「形式陶冶説」のルーツは？

ソーンダイクが批判した形式陶冶説には「転移」の考え方が入っています。転移のルーツ(源流)を探るといことは、「形式陶冶説」のルーツを辿っていくことでもあると言えます。そこで、ここでは「形式陶冶説」のルーツを、探ってみます。そのヒントは、転移研究をレビューしたBransford & Schwartz (1999)の中にありました。「**形式陶冶に関する議論は、ギリシャ時代にさかのぼる(Mann 1979)**」と。そこで、このMannマン(1979)の書籍を基に、形式陶冶説のルーツと、近代までの流れを見ていきます。

まず、マン(1979)は、西洋の教育は、ギリシャから始まると述べ、**哲学者プラトン(BC427-BC347)を形式陶冶説の父である**としています。形式陶冶を、mind 精神、知性の教育とし、プラトンの考えや弟子への指導は、まさにそれであったと考えたのです。しかし、彼の**弟子であったアリストテレス(BC384-BC322)は、practical skills実用的なスキルの訓練を強調**しました。実質陶冶につながる考え方です。遠くギリシャの時代から、形式陶冶と実質陶冶の論争は始まり、現代にも続いているのです。

ギリシャ文化を受け継いだ**ローマ人たちは、形式陶冶説に則り、若者の記憶力を訓練**しようとしていました。彼らは、暗記を必要とするタスクを過剰に若者に与え、その精神を鍛練しようとしたのです。彼らが使用していたラテン語が、その後の実質陶冶重視の教育における主要科目となっていきました。

転移のルーツ(2) 「形式陶冶説」のルーツは？

仮に、ギリシャの哲学者プラトンが、古代における形式陶冶の父であるとするならば、**イギリスの哲学者John Locke(1632-1704)が、近代における形式陶冶の父**であると言えます。ロックは、数学を、認知訓練の手段として偏向了しました。その価値を語る中で、彼は形式陶冶の主要な原則を提示しました。それが「transfer of training 訓練の転移」です。いわば、数学を学ぶことで、認知能力が鍛えられ、他の領域にも活かすことが出来ると考えたのです。このマン(1979)の書籍においては、ここで初めて「転移 transfer」という言葉が出てきます(138ページ)。しかし、ロックは、形式陶冶の人気ツールであるラテン語を毛嫌いしたため、形式陶冶の父と呼ばれる反面、アンチ形式陶冶という側面も持っていました。

ロックがいたイギリスという社会カースト制度がある社会において、**上流階級に対しては、形式陶冶が教育され、下流階級に対しては、実質陶冶(実用的教育)が行われる**ようになりました。イギリスの植民地であったアメリカにおいても、形式陶冶が受け入れられ、1650年には、ギリシャ語とラテン語の習得が、ハーバード大学で求められるようになったのです。その後、19世紀になる頃には、アメリカのほぼすべての高等教育機関において、形式陶冶として古典を学ぶことが必須となりました。

このように、**特定の科目を学ぶことで、認知能力や精神が鍛えられ、他の分野で活かせるという「転移」の概念を含む形式陶冶**のルーツ(源流)は、古代においては、ギリシャの哲学者プラトン、近代においては、イギリスの哲学者ロックにまで遡れることが分かりました。

- 1) プラトン、ロックによる形式陶冶説
- 2) ソーンダイク(1901)による転移研究
- 3) フレイシュマン(1953)による企業における研修転移研究

MMMT: Monday Morning Manabi Time!

1. オープニング(導入)

2. ボディ(本論)

- 研修転移
- 研修評価
- OJT 等

3. クロージング(結び)

MMMT: Monday Morning Manabi Time!

